

● 1月選評

小島なお

・ 旭日百（滋賀県）

ぬけがらの毛布のすきまを
埋めてみて

わたしは保温される白米

あなたの出ていった毛布には、身熱が残されている。そこへ自分を埋めていられる幸福は、炊飯器の保温機能に守られる白米のように自動的かつ受動的。

・ 香取小春（宮崎県）

輪郭をもたないぼくに射し込んだ
平田オリザの演劇だった

生きることと輪郭を与えるのが演劇だろう。平田オリザによる人間が虚構のなかにメタ構築されるとき、ぼくもまた生きること演じているに過ぎない。

・ 大嶋 碧月（兵庫県）

柿を食えば

柿を食えない季節から

遠ざかってゆく

そんな秋

法隆寺の鐘は鳴らず、四季のなかの浮島のような寂寥に沁みてゆく。秋と奈良を俳句で求心的に詠んだ子規と、秋と自らを短歌で遠心的に詠んだ主体と。

・ 洋梨 またら（群馬県）

端っこに寄せた単語帳

ロールケーキは夜光る

電車でも浴室でもめくる単語帳。けれど、ロールケーキが光る夜の間だけは、退けておく。すでに存在する言葉を覚えることよりも、大事なことがある。

・藤井 柊太（神奈川県）

人だから大体のことは想像の

回廊をゆくグレイハウンド

人の話をしていたのに、いつのまにかそこにグレイハウンドが走っている。回廊的な構造が、大体のことを想像できてしまう想像力の危うさのメタファーになる。

・折原（神奈川県）

冬の夜に拾い集めた打楽器を

朝のデスクに並べてもいい？

冬の夜の空気を湛えた打楽器は音がよく響きそう、朝鳴らすにはうるさそう。タスクを並べるべきデスクの上に並べた打楽器の賑やかなアイロニー。

・工藤 志与（青森県）

人間のかけらを揉んで海の音

代わる代わるのコインランドリー

水難者たち、戦死者たち、被災者たち。海中に絡み合うたくさんの人間の断片。揉まれて洗われて、そのうち誰が彼らの魂を取り出しに来るのか。

・太田 葵（奈良県）

ゆるやかに見誤るなよ日常を

土曜日の豆日曜日の4

日常は意味・無意味の情報や記号に溢れすぎている。土曜日が豆（節分？）であって、日曜日が4（死？または詩？）であってもみな素通りするばかり。

・カーミング（愛知県）

梅干しの右を殴った形です

「形」はフォルムのことか、顛末のことか。潰れた姿の梅干しを説明しながら、その実みずからが梅干しを殴ったことを告白しているような奇妙さ。

・湯島 はじめ（東京都）

まぼろしの砂丘に

いつかあらわれる

返せなかったままのバレッタ

啄木はピストルを掘り出し、俵万智は飛行機の折れた翼を埋めた。砂には自身の願望が埋まる。バレッタが留めていた美しい髪はさらさらと無形の砂となって。